
成り上がり・目指すは大將軍！！

プループ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成り上がり・目指すは大將軍！！

【Nコード】

N2256Y

【作者名】

プループ

【あらすじ】

帝国の侵略により故郷を失った少年、ライ

ライは帝国に復讐を誓う

夢は大將軍となり、帝国を討つこと

そんな少年の物語が今、始まる

この作品はエブリスタ、モバゲーで連載中の作品です

プロローグ（前書き）

すべてはここから始まった

ブローグ

風が吹いてきた。

春には不釣り合いな冷たい風だ。それらは弱りきった俺の体全身に容赦なく突き刺さる。

（ここは・・・・・・・・どこだ？

ここは・・・・・・・・.. いたい・・・・・・・・..）

家だった物はすべて焼け落ち、廃墟と化している。辺りはいくつもの死体が転がり、腐敗臭が鼻を襲う。

俺は静まり返った村を一人、ふらふらと歩いていた。

隣国のミストクラウン帝国がここタラントへ侵略してきたのはつい

一週間ほど前だった。国境からかなり離れた所に位置する俺の村は帝国の予想をはるかに上回る侵攻の早さに対応できなかった。

そして、俺の村は

一瞬で壊滅した……。

俺はなぜ生き残れたのかわからない……。

帝国の騎馬隊が村を蹂躪するのを見た。

．．．．．それは、あまりにも悲惨な光景だった。

そこから記憶がない．．．．．。

意識が戻り、次に目に映ったのは、俺を庇うかのように覆い被さった母さんの死体と、廃墟と化した村の光景だった．．．．．。

意識が朦朧としてくる。

不意に腹から甲高い音が鳴る。

（腹．．．．．減ったな）

ここ三日間何も食べていない。しばらく歩いていると、俺は何かにつまづき、弱りきった俺の体は地面へと傾いていった。

しかし、いつまで経っても俺が地面に倒れることはなかった。

気づくと俺は誰かにしっかりと抱きかかえられていた。

上を向くと俺の目には、中年の優しそうなおじさんが映った。

「つらかったでしょう。もう……、もう大丈夫です」

しっかりと抱き締められる。その行為は冷え切った俺の体を徐々に暖めていった。

（暖かい……………）

しばらくそのままだった。
おじさんは俺を抱き上げた。

「気をしっかりと持ってください。

これからあなたに新しい居場所を与えます」おじさんの腕はとても大きく、そして暖かかった……

俺を拾ってくれた人はファブルさんといい、正規兵候補訓練施設ファブル・プロシードの管理人だった。

しばらくすると、広い草原についた。

そこには大型の馬車と、俺と同じように拾われた孤児の子ども達がたくさんいた。

おじさんが言うにはこれで俺を施設へと送るらしい。

馬車は大型のテントを内蔵しており、テントの中は窓がなく、入ると薄暗かった。

俺は馬車の中で一人うずくまっていた。

程なく馬車が出発した。

子どもの中にはむせび泣く者が何人もいた。

俺はこのとき、なぜか母さんが死んだことを過去と認識していた。

あまりに突然なことに感覚が麻痺しているのかもしれない……。

馬車の車輪が鳴らす連続的な音を聞きながら、俺はこの戦争に怒りを覚えていた。

（俺は……、俺は強くなる。強くなって必ず、……必ず帝国を討つ！
必ず復讐してやる！！）

この戦いで一方的に攻められたタラントだったが、援軍として到着した同盟国の軍が間に合い、なんとか帝国の侵攻を食い止めることができた。

戦いは三か月にも及び、不利と判断した帝国が撤退することでの戦いは幕を閉じた。

あの大戦から一二年が経った。

今、俺は必死に訓練をし、プロシード内で剣術トップの成績を勝ち取った。そして、今まさに、俺は正規兵へとなろうとしている。

夢はすでに決まった。

俺は大將軍になる！！

この国を護るために・・・

そして、帝国を倒すために・・・

施設での日常

(1) (前書き)

施設での何気ない日常

ライにとっては唯一の安らぎ

そんな日常もだんだんと終わりが近づく

施設での日常

(1)

春が近づいてきた。

俺がプロシードに来て、一二年目の春。

今年で俺はここを卒業し、正規兵に登用される。

俺は一二年前、ファブル先生に拾われプロシードに入った。

ここ、ファブル・プロシードは一二年前に創設された施設であり、帝国との戦いで自国戦力の強化が必要と考えた国王が創設した訓練施設の一つである。

この施設は身よりのいない孤児などを集め、戦力になり得る兵士に育て上げることを目的とした施設で、10年近くの充実した訓練を経て生徒を一人前の兵士に育て上げる。

指導教官は10人近くおり、修業科目は剣術・槍術・弓・兵法学・道德の五つである。入ってすぐの五年間は基礎的なトレーニングを積み、その後の六年間は実戦的な訓練を受けた。

そして、11年の長い修業を経て、17歳となった俺は仕官を間近に控えていた。

「テヤアアアー！！！」

バチン、バチン、と竹刀のぶつかり合う音がする。

剣術の時間。

今日は試合だった。俺は次の相手となり得る者達の試合を見ていた。この勝者が次の俺の相手となる。

幾分か時が経ち、攻めに耐えきれなくなった片方の男にもう片方の男が胴を決めた。周囲から歓声が沸き上がる。男はガッツポーズをし、次はお前だとばかりに俺を睨みつけてきた。「次、ライ、前へ！！！」

「はい！！」大きな声で指名してきたファブル先生に負けないくらい大きな声で返事を返す。

軽快に立ち上がり、フィールドの周りを囲む群集をかき分けて前に出た。相手と向かい合い、一通りの作法を終える。

「始め！！」

試合開始の号令が成された。

それと同時に相手が打ち込んできた。俺は動じずにしっかりとそれを受け止める。

（勢いがあるな・・・・・・）

一撃一撃が重い。しかし、その代わりにいくつか隙がみられた。

（いける！）

俺は一度後ろに下がり、竹刀をまっすぐに構えた。

そして、相手が打ち込んできた次の瞬間、俺は相手の一撃を受け流し、そのまま一気に胴に一撃を放った。

「そこ！！」パチン、と大きな音が鳴り響く。

一瞬の後、相手が倒れ、前の試合よりも大きな歓声が沸き上がる。

「いやー、お見事です」

パチン、パチンという拍手とともに軽快な足取りで歩いてきたのはファブル先生だった。

もう51にだというのに、全く年を感じさせない動きをしている。

その元気は一体どこからきているかと心配になる。「前よりも格段に強くなりましたね。」

ここまで強くなってくれと、私も長年教えてきた甲斐があるというものです」

ファブル先生の言葉が、俺の胸に響く。俺は実戦修業が始まってから、強くなることを一心に思い、死に物狂いで特訓した。

そして、剣術だけはこの六年間、一度もトップを逃したことはなかった。

「もうそろそろ卒業ですし、わが施設の期待の星であるライ君には、ぜひ正規兵となってどんどん出世してもらいたいものです」

ファブル先生はいつもの決まり文句を言ってきた。

俺は総合成績では少し落ちるものの、剣術だけは絶対にトップを誰にも譲らなかった。

それは、大將軍になるという強い決意と、この人に俺の実力を認められたい、と思ったからだ。

先生はいつも、ライ君の将来が楽しみです、と穏やかに言う。そして、いつもそれを聞くと照れてしまう自分がいた。

（ファブル先生はいつも穏やかな人だな。俺はいつもこの人に助けられている……）

俺にとってファブル先生は尊敬できる師であり、また父のような存在だった。

俺の成長を温かい目で見守ってくれ、いつも夢を応援してくれた。

ファブル先生はもう二言ほどしゃべり終えた後、そろそろ、と言って審判を続けるためにフィールドに戻ろうとした。俺もそれについていき、次の試合の観察をすることにした。

剣術の修行を終えた後、俺は兵法学を学んだ。夕方にはそれも終わり、今日の修行は終了となった。自由時間になり、俺はいつものように疲れを癒すために「癒しの原っぱ」へと向かった。

「癒しの原っぱ」はプロシードから歩いて10分ほどのところにある。

そこには小高い丘があり、その上に大きな木があり周りは小さな木々に囲まれた場所だ。

ここは草も柔らかく、どこか神秘的な雰囲気があるため、睡眠をとる場所としてよく好んで自由時間にきている。

俺は大の字になって空を眺めた。赤い夕日が沈みかけていてひどく寂しい気持ちになる。

（あと一ヶ月でここも卒業か……）

長かったようで短かった気がする。

俺が拾われたのがつい先日のように感じられる。

仕官することへの喜びは感じているが、ここを離れることに寂しさ
と言いつのない不安を感じている。

十一年間ここで過ごしてきた。俺の人生の大半がここでの生活だった。

これからそれを捨て、この先に広がる大海原へと身を投げ出すことになる。

夕日が小さくなるにつれ、俺の心はどんどん悲しみを増していった。

しばらくして、不意に大きな影が俺を覆っていた。

見上げると上には目つきの鋭い男が立っていた。

「リーファイ……か。」

そこには俺と同じ孤児で、一緒に拾われた親友のリーファイが立っていた。

リーファイは我がファブル・プロシードでの総合1位の天才。

武術面での剣術、槍術、弓ではトップ手前で兵法学はダントツのトップといった、かなりのハイスペックを持つ男だった。

寡黙な男で、あいそが無いため他人からは敬遠されがちだが、長い付き合いの俺にはこいつは人間関係を必要以上に築きたがらない男だということを知っている。

常に自分の確固たる意志を持ち、相手の考えや言葉を鵜呑みにしない。

そして、自分が失敗した時の醜態をさらしたくない。

そういったプライド意識が人一倍強い男だった。

そのために自分を理解しうる人間を作りたがらず、必ず一定の距離を置きたがる。

俺はこいつをこう推測しているが実際はもっとこいつの表層心理は複雑なのかもしれない。

少し経って、リーファイはずっと俺の隣に座った。

そして遠くをぼんやりと向きながら、

「ここを離れるのが不安か？」

と、ぶしつけに尋ねてきた。

不思議だ。

俺はいつもこいつを頭では食えない奴と評しながらも一緒にいるとても満ち足りた気分になる。

リーファイもそれは同じようで顔をくるりと向け、すがすがしい微

笑をむけてきた。

「ああ」

だからいつも素直に答えてしまう。

「お前がそう考えるのもわからなくはない。
悩むときは悩んでいたほうがいい。
卒業までに答えを見つければいいんだ」

「そう・・・・・・・・だな」

なぜか自分の考えがすべて読まれたのに悪い気がしなかった。

むしろ気持ちが悪くなった。

誰かに理解されるのを心の底では待っていたのかもしれない。

「ライ！！リーファイ！！」

そんなとき下から俺たちを呼ぶ声がした。

下を見るとサイとエルスが丘に登ってきた。

サイは俺と同学年で俺とリーファイと同時期に拾われた男で、髪を七三に分け、ぱっちりとした目が特徴的な外見をしている。

明るい性格をしているが、思ったことをすぐ口にだしてしまつきらいがあつた。

「暗いやつらが二人して夕方に原っぱで語り合うなんざ気色悪いな」

「悪いかよ」サイはおどけた口調で言ってきた。

俺はすかさず反論を言う。

サイとは冗談を言い合う仲で俺の数少ない友人の一人だった。

そんなサイをみて、リーファイは呆れた口調で

「おまえは………、何も考えなさそうだな」

と、やれやれといった口調で呟く。

「なんだ、リーファイ。何かはわからんが随分失礼だな」

「いや、ただもう少し繊細なやつだったらなと思ってな」

「何だと、この根暗男！」

リーファイとサイはよく口論を言い合う仲だ。傍目から見ると、かなりいがみ合っているようだが二人はこのやりとりをとても楽しんでいる。現にリーファイはさっきよりも随分変化に富んだ明るい顔をしている。

「また、始まりましたね」

ボソツ、とエルスは俺に囁いてきた。

エルスは俺の一つ下の後輩であり、とても明るい性格をした男である。

しかし、なかなかしたたかな部分があり、場の雰囲気を読み自分をいいポジションへと置くことでうまく立ち回っている。

今日も二人の邪魔をしないようにと俺と同じく傍観の立場に回っている。

この行動は適切で、あの二人の口論はなかなか決着がつかず、第三者を巻き込む傾向があった。

「今日も遅くなりそうだな」

「そうですね」プロシードは自由時間は3時間と定められている。

前日と同じく、今日も門限には間に合いそうもなかった。

（まあ、……いいかもな）

成績はすでに付け終えているのもう下がることはない。

少ししてエルスが帰った後、俺も口論に加わり、三人で一緒に日が沈むまで語り合った。

（卒業したらおそらくは二人とは別々の部隊に配属されるかもしれない……）

帰る途中、ふと思った。

帰り道は少し雲がかかった満月が照らしてくれ、難なく進むことができた。

エルスやファブル先生と会うこともないだろう。しかし、最後に楽しい思いでがなかったら絶対に後悔する。

そんな気がした。

(最後まではこのでの生活を楽しむとするか)

そう思い、足を進める。

今日の足取りはいつもよりも軽快な気がした。

満月はすでに雲がなく、俺達は無事プロシードへと帰ることができた。

施設での日常

(2) (前書き)

卒業まであとわずか

平穏な一時

施設での日常

(2)

パチツ、と甲高い音が部屋に響きわたる。

今日の三つ目の修業。

道徳

今日はファブル先生が生徒達の成績の提出と、仕官先の決定をするために都へ早馬で飛んでいった。そのために来た代理の先生は頭のトレーニングの一貫として遠国から伝わった将棋を俺達にやらせた。

俺は今リーファイとっっている。

「王手、・・・・・・・・詰み」

完膚なきまでに詰まされた。

これで俺は三連敗だ。

「もう少し頭を使ったらどうだ？」

リーファイは悦に入るわけでもなく、無表情で言い放つ。その抑揚の無い言葉はかえって軽く言われたときよりもぐさりと俺の心に突き刺さる。

「リーファイが強すぎるんだよ」

「いや、単にライが攻めすぎてるだけだ。攻めの……手……は悪くはないんだが、王に近づくにつれ攻め急いでいる。だから逆に攻められた時にぼろぼろと崩れるんだ」

そうかもしれない。

今までのリーファイの……手……を少しずつ思い出す。

「俺たちはもう半月で正規兵の仲間入りだ。もつとも、新米正規兵はあと二年修業を都のはずれで積むことになるから実戦は19から

か。ライのように何も考ええずにただ剣だけを振ってるだけでは出世はできないぞ」

ゆっくりと話しを続けてきた。

もちろんそんなことはわかっている。俺だって何も考えていないわけではない。

「だったらどうしたらいいんだ!」

少し怒気を含めて言う。すると、リーファイは俺をじっと見つめてくる。

「お前の夢は何だ?」

唐突に尋ねてきた。長いつきあいのこいつには俺の夢はすでに周知のはずだ。

しかし、やるせない気持ちの俺は踏みとどまることはなかった。

「大將軍だ!!」

俺は高らかと答える。

リーファイは黙り込み、無言で俺にもう一戦将棋を促した。

そして、顔を上げ、しっかりと俺の顔をとらえる。

「だったらまずは百人将、次に五百人将……といった具合にそれとなるための小さな目標と計画を今までたてたことはあるか？」

「……………っ!!」

言葉に詰まる。俺はリーファイの言葉に今までの自分を考えさせら

れた。

大將軍とはこの国の軍事を司る最高の位であり、それになれるのは当然だった一人で、その下には將軍、千人將、五百人將・・・・そんな具合に下に続き、ピラミッド型と同じで下に行けば行くほどその位につく人数も多い。

大將軍になるということは幾万とも知れないライバル達を蹴落としてようやくなれるのだ。

現実的に考えれば、まずすぐ上を目指すのを小事、大將軍を大事ととらえ、短期目標に目を向けなければならない。少しばかり大將軍に視線をむけすぎている、他をみていなかったのかもしれない・・・。

そう考え込んでるうちにパチッ、と大きな音がした。リーファイは自分の駒を並べ終えたようだ。

「そんなに焦って考え込むことはない。正規兵になってからでも考える時間はある」

パチッ、パチッと駒を置く音が響く

リーファイは俺の分も並べ始めた。俺はぼんやりとそれを見ていることしか出来なかった。

「大事なのは夢に向かう姿勢だ。……その面においては前はすでに合格だろう……。ただ、目の前の事にも少しは気に少しは気にかけておいた方がいいと思っていただけさ」

言い放ったリーファイの顔はどことなく精気に溢れていた。心なしか駒をはじく音が高くなった気がした。

（リーファイの夢はこの国の宰相だったはず……。俺と違ってリーファイはより現実的に夢の大きさと夢に到達する計画をたっているのかもしれない。）

駒を持つリーファイの手がいつもより大きく見えた。

昼下がり

槍術の修業が始まった。後期は実戦練習なので生徒はそれぞれ適当な相手を見つけて打ち合う。

俺は今、サイと打ち合っていた。

互いの棒が交差しあう。サイは変幻自在の動きで俺を翻弄する。俺は防戦一方だ。だんだんと一撃一撃が重くなってきた。

（このままではいずれ負ける）

汗で手が滑り、いつ竹刀を落としてもおかしくない状況だ。俺は体勢を整えようと後ろに下がろうとしたが、サイはここぞとばかりに攻め立て、それを許さない。さらに一撃が重くなる。

もう幾ばくも保たない。

道は一つしかない。俺は覚悟を決め、視覚に全神経を集中させた。

（あと少し……、あと少し……）

今はよりサイの動きがクリアに見えた。

（今だ！！！）

サイが横に棒をたたきつけてきた。とっさに下に屈み、一瞬のすきをついて思いっきり棒を突き出した。

（決まった！！）

しかし、俺の竹刀に当たった感触がしなかった。

（消えた！？）

一瞬、頭が混乱する。

（どこに？）

そう思っのもつかの間、上を向くとサイがいた。

そして、次の瞬間、俺は意識を失った。

「う・・・・・・・・ん」

気が付くと、俺は木の下で寝そべっていた。体が重い。横をチラリと向くと竹刀で打ち合っている生徒が何人もいる。どうやらまだ修業は終わっていないようだ。

腰が痛い。

どうやらサイの棒は腰に直撃したらしい。あの体勢から飛び上がった、後ろから体勢を崩さずに打ち込んだのだろうか……。サイは。やはりサイはすごい。槍術トップの成績をほこるだけはある。

俺はため息をついた。

しばらく空をぼんやりと眺めていると木の反対側に誰かが走ってきた。よく見るとそれはエルスだった。確かエルスの学年はいま剣の修業だったはず……。

「何やってんだ、こんな所で」

わりと穏やかな口調で尋ねる。俺に気づいたエルスは笑いながら、

「剣の修業をサボってきました！」

と言った。

またか……。

やれやれと思ってしまう。エルスは剣・槍術の修業をよくサボる。そして、それはいつも外で行われ、先生が付かない打ち込み練習のときを狙ってだ。

エルス曰わく、地道な反復練習は苦手らしい。

しかし、だからといってエルスは怠惰な人間というわけではなかった。エルスは弓では学年を問わずトップに位置する。エルスは弓をするときだけは真剣そのものだった。

エルスが弓の修業を受けているところをたびたび目に行うことがある。

エルスは一度弓をつがえると人が変わるのだ。

周りのものをまったく視界に入れず、ただ的を一点に見つめ、一本一本を丁寧に撃ち、修業が終わるまで終止口を開かない。

（こいつが正規兵になったら弓兵一部隊は率いるかもしれない・・・）

ふとそう思った。

そんなエルスは手で扇ぎ、冬はまたこないですかねー、いつものように軽い口調でいつている。

天才と怠惰な人間は紙一重か……。人間はやはりうまいことと作られている。全体のバランスを整えるため一方のスキルがずば抜けて高いともう一方はずば抜けて悪く作られるようだ。

ふっ、と笑い、俺はゆつくりと立ち上がった。もう腰の痛みはない。

「どうせだったら俺と槍で打ち合わないか？」

エルスはあからさまに嫌そうな顔をして不平をいうが、別段嫌がってはいないようだ。

あと半月もない。

（エルスとももうそろそろお別れか……………。）

ふとそんなことを思う。また腰が痛みだしてきた。現金なものだと思いつながらゆつくりと歩き出した。

ファブル先生（前書き）

ファブル先生との決闘

ファブルはライに自分の伝えたい最後の言葉を伝える

ファブル先生

「ファブル先生、少しいいですか？」

今日は卒業の一日前。俺は最後にファブル先生に剣の試合を申し込むために先生の書斎に上がり込んだ。

（俺はこの人に一人前と認めてもらわないとここから旅立てない……最後に俺の成長を見せたい。）

ファブル先生はパタン、と読んでいた本を閉じ、何ですか、と尋ねる。

「俺と剣で試合をしてください！！」

あまり意外ではなかったらしく、にっこりと笑って、いいですよ、と一言言ってくれた。

「どうせなら……癒やしの原っぱ……でませんか？」

俺ははっと驚く。そしてそこを選んできたファブル先生に感謝をした。

（最初も最後も……癒やしの原っぱ……か……）

俺はある種の運命的なものを感じずにはいらなかった。

・ ・ ・ 癒やしの原っぱ ・ ・ ・

ここは俺が初めて先生と剣の打ち合いをした場所だ。

今でも覚えている ・ ・ ・ ・ ・ 剣の成績がトップになったあの日、先生は俺をここにつれてきた。

「先生、ここはどこですか？」

周りをもの珍しそうに見る俺を見て先生はにっこりとほほえむ。

「ここは ・ ・ ・ 癒やしの原っぱ ・ ・ ・ と呼ばれる場所です。」

小高い丘に大きな木が一本立っていて、周りは木々で囲まれている。へんぴなところのようなのになぜか神秘的な包容力がある場所だった。自然と心が落ち着く。

「ここは昔、ある将軍が戦の帰りにいつもよっていた場所です。その将軍はいつも来る前の戦でなくなった部下たちの形見をあの木の下に埋めていました。そして、休暇はいつもここで時を過ごしてい

たのです……。」

ファブル先生はゆっくりと優しく俺に語りかけた。

10歳の俺には先生の言っていることがよくわからなかったがそれでも先生にとって大切な場所だということが先生の様子から感じ取れた。

しばらく話しをした後、先生は俺に向かってほほえみ、

「ライ君、剣術の成績トップでしたね。おめでとございます。」

と言った。

俺は急な話題の転換にとまどい、何も答えられなかった。

なぜその話題を振ってきたのだろう。

俺は疑問に思った。

そんな俺をみて、先生はまた穏やかな表情をした後、そんな疑問をも忘れてしまうほど衝撃的な言葉を言い放った。

「わたしと剣の試合をしませんか？」

俺は一瞬何と言われたかわからなかった。

再度頭の中で先生の言葉を復唱した後、ようやくその言葉を理解した。

俺はかなり動揺したが、素直にその提案を受けることにした。

「そうですね、私に一太刀でも与えることができたならあなたの勝ちにしますよ。」

そう言い、先生は唐突に石ころを下から拾い上げた。

「今からこれを上へなげます。この石が地面に落ちたら開始としましょう。」

俺が持っていた竹刀を構え終えると先生は、いいですか、と一言いい、石を高く投げ上げた。

俺は先生と打ち合えることに喜びと興奮を感じていた。

石がとてもはつきりと見える。

連続写真で写したかのように落ちていく様がクリアに見えた。

ポツツという音と同時に先生に飛びかかった。

パチン、という音とともにお互いの竹刀が交差する。ファブル先生は俺の一撃を簡単に受け止めた。

「元気がいいですね。やはり子供とはいいいいものです。」

パチン、パチン、パチン、と竹刀の音が原っぱに響き渡る。俺が打ち込んで先生は受け止め続けた。

(なんで・・・・・・・・なんで一発も・・・・・・・・。)

あの手この手を尽くしたが結局ファブル先生には一発も当たらないまま、俺はへたばってしまった。

俺は疲れて大の字になっていた。

情けない姿の俺の隣りにファブル先生はゆっくりと座り込んできた。

先生は全く息を切らしていなかった。

それもそのはず、先生は一步も元の位置から動いていないのだから。

「ライ君、剣とはどういうものだと思いますか？」

唐突に問いかけてきたファブル先生の顔は優しさ以外の何か・・・・・・
・・何か深いものを思い出しているような表情だった。

「剣ですか？」

「ええ、剣です。」

問いかけても先生の表情は変わらなかった。先生の微笑みがいつもと違いまるで作り物のような気がする……………。

「あなたにとつての剣とは何ですか。……………面白い遊び道具の玩具。……………自分をかつこよく見せるための道具。……………強さを示すための道具。」

俺を責めているわけでもなく、語りかけるような柔らかな口調だった。

しかし、相変わらず目は俺ではなく、他のなにかを映し出しているような気がした。

「剣は人を殺し得るものです。しかし、剣の本質はそこではない。自分を、人を守るためのものです。」

少し語気が強まった。

そして急に作つたような微笑みが消えた。

「さっきライ君に話した將軍。
……………実はあれは私なんですよ。」

ここは行きつけの場所でした。」

そこで視線を俺から周りの風景に移す。

「私は………たくさんの仲間を、部下を守れませんでした。」

急に声のトーンが下がった。

そして先生は黙り込んでしまった。

俺はただ先生が振り向くの待っているだけだった。

しばらく経ち、先生はゆっくりと俺の方に首を傾けた。

「ライ君、君がもつことになる剣はとても恐ろしいものです。そして、剣には君がまだ知らない様々な使い道があります。人を殺す為に使うのもその使い道の一つ。下の者に強さを見せつける為に持つのもその一つ」

先生は少しずつ言葉を言うのが早くなってきた。そして一言一言に言いようもない力がこもっていた。

「人によつて剣の価値は違います。さつき私の言ったことも私の中の剣の真価。しかし、君はまた違った価値を剣に見いだすかもしれません……。私の時は……。」

不意に先生は次に言おうとしていたことを止めた。

口に手を当て、俺を見て少し困惑したような表情をした。

先生はしばらく黙った。

（何だろう……。何か言いにくいことかな。）

しばらくして、先生は俺をまっすぐに捉えた。その眼はもはや完全に俺を映していた。

「ライ君。これからは君にとっての剣を見つけられるように頑張ってください。そして今の話しは忘れないようにしてください」

最後にようやくいつもの表情に戻った。

「はい。」俺は少しほっとし、戸惑いながら返事をした。その日の

帰路の先生はいつもよりも穏やかだった。

「私に一撃でも加えれば勝ちでいいですよ」

あの試合から7年が経った。しかし、あの時と全く変わっていない。このやりとりも……、この原っぱの情景も……、そして、先生との試合の前のこの高揚感も……。

静寂が辺りを包み込む。

先生は俺に向き合い、にっこりと微笑む。次にでる言葉が容易に想像できた。しかし、俺は無性にそれを確認したい衝動に駆られた。

「ちなみに俺の敗北条件は何ですか。」

すると、先生は小さく笑って、

「ライ君が動けなくなるまでです。」

と穏やかに言った。俺もつられて笑った。先生は腰をおとし、適当な大きさの石を拾う。俺が構えるまで待つ。

「もう説明はいりませんね。……では、始めましょう。」

先生は高く石を投げ上げた。

（いよいよだ。）

この試合がここでの生活との決別であり、これからの始まりなのだということを感じた。気持ちが高ぶる。

俺は石が落ちると同時にあの時のように先生に飛びかかった。

一際大きな音が原っぱの草を震わした。

俺の手が衝撃でピリピリと震える。先生と俺の交差しあった竹刀は月の光に照らされなんと幻想的な光を放っていた。

「ふん！！」

少しして先生は竹刀の角度を変え、はじき返した。俺は後ろに大きく下がる。

「やっぱりあの時とはまるで違います。私に飛びかかってくるスピード・・・・・・・・、一撃への重心の移動・・・・・・・・、力・・・・・・・・。私に教わったものを完璧にマスターし、さらに自分でアレンジを加えている・・・・・・・・。」

先生は一方的に語りかけている。しかし、話している先生には隙が全く見当たらない。

「やっぱり君は他のどの生徒よりも群を抜いて剣の腕前はいいようです。そして私の予想以上に成長してくれました。」

先生は一気に近づいてきた。竹刀をスツと横にやり、胴を放つてくる。

「っ・・・・・・・・!!」

俺はすぐさま竹刀を移動させ、先生の一撃を受け止めた。

「ぐっ・・・・・・・・」

その衝撃で少し身体が斜めに傾く。すぐさま先生は二撃を肩口へと放ってきた。

(速い………!!)

俺は後ろの足を動かし、避ける。そして先生の腕へと竹刀を打ち込む。先生もその動きを察し、竹刀で受け止めた。

そして再びつばぜり合いが始まった。

風で辺りがざわめく。

交差した竹刀は前後へと小刻みに動き、空気を震わせる。どちらも一歩も譲らない。

俺は重心をずらし、押してきた先生をそのまま弾き飛ばした。先生は先程の俺のように大きく後退する。

「やりますね。」

先生は小さく笑った。

風が吹いてきた。月に影がさし、先生の姿が薄暗くなった。そして先生の顔は急に無表情へと変わった。

「このままでは少し失礼ですね。少し本気を出させてもらいます。」

先生の雰囲気が一転して、殺気だったものになった。何か見えざる

ものが俺の体を圧迫しているような錯覚に陥る。

（このプレッシャーは……………。）

手に汗が滲んだ。そしてそのプレッシャーが一際大きくなる。

（……………、来る！！）

一瞬の後、先生は驚くべき速さで懐へと入り込んできた。

「……………」

すんでの所で先生の振り上げた竹刀を避ける。しかし、先生はすぐさま体勢を整え、二撃をわき腹へと打ち込んできた。

（早い！！）

大きな音とともに俺は横へと飛ばされた。ギリギリの所で自分の竹刀を割り込ませ、直撃は避けられたがそれも気休めでしかなかった。

地面に背中を預けた姿勢の俺の視界に先生が映る。先生は竹刀を振り上げ、今にもそれを振り下ろそうとしていた。

（……………、まずい）

俺は身体を転がして間一髪でそれを避けた。そしてすぐに起き上がり、すぐさま距離をとった。

「ハア、ハア……」

気づいたら息があがっていた。

（この人は格が違う。）

汗で眼がしみる。視界が揺らいできた。

（何か……、何か……）

すると、先生の動きに一つ妙な点があった。ほんのわずかだが、先生の左足が右足と比べて足取りが遅かった。

（もしかして……）

確証はなかったが、この状況で試す価値はあった。俺は竹刀を低くし、下段の構えをとる。

（チャンスは一度だけだ。）

月は雲が去り、先生を明るく照らした。

（今だ。）

俺は目一杯に足を蹴り上げ、先生に接近した。ある程度まで近づき、左足でターンし、右へと回る。

「っ……………」

先生が左足を動かし体勢を変えてきた。しかし、その動きはやはり少し遅い。先生が竹刀を横にして、俺へと打ち込んでくる。俺はギリギリの所でかわし、左側の懐へと潜り込んだ。

「っ……………」

「ウオオオーー。」

俺は竹刀を思いっきり上へと振り上げた。

（決まった！！）

俺はそう確信した。しかし、わずかな感触とともに先生の姿が視界から消えた。

「え!？」

俺は目を見張った。不意に足に大きな衝撃が伝わった。一度宙に浮き、重力に沿って背中を地面へと打ち付けた。気づくと先生の竹刀が喉元へと向けられていた。

「まだ………、しますか？」

先生は無表情で問いかけてきた。その顔には微かな動きも許さない威圧感があった。

「俺の………、俺の負けです。」

ギリツと歯ぎしりをした。しかし、この状態では何もできない。俺は素直に諦めることにした。

あの時、先生は俺の一撃をとっさに左足を滑らして体を落として避けたのだ。その左足の動きが今までよりも格段に速かったため、その動きを予測できず、あたかも消えたかのような錯覚をおこした。そしてそのまま左腕で足を払われた。

今思えばあの不自然な足の動きはフェイクだったのかもしれない・・・。

「は・・・・・・・・。」

俺は笑いが込み上げできた。完全に騙されたことを知って、自分の短絡さに情けなくなってしまうていた。

先生は竹刀をしまい、そつと手を差しのべてくれた。

「ありがとうございます。」

俺はその手を取り立ち上がる。先生はいつものようににこやかな表情をしていた。

「先生にはやられましたよ。左足が・・・・・・・・実は罔だったなんて気づきませんでした。」

俺は少し顔を苦ませて先生に話しかけた。すると先生は少し顔を歪ませた。

「気付かれましたか・・・・・・・・。実は別に罔でもなんでもないんですよ。昔、左足を痛めましてね・・・・・・・・。」

えっ、と俺は思わず声をだした。

先生の動きはわざとではなかったのか………。

「どうして足を痛めたのですか。」

「それは………。」

先生は言いよんだ。何かを言うのをためらっているようだった。しばらくして先生は小さな声で言った。

「昔、………戦場でやられました。」

先生の声はひどく重みのある声だった。

「そう………ですか」

これは触れてはいけない話題なのかもしれない。俺はしばらく黙っていた。沈黙がこの場を支配した。

そして、先生は一通り笑い終わると急に真剣な顔で俺を見つめてきた。

「ライ君。一つ忠告があります。よく聞いて下さい。」

先生の声に重苦しさを感ずる。

「君の夢を叶えるにはいずれ君は自分自身の手で、剣で人を殺すでしょう。それも数え切れないほどたくさん……しかし、決して剣を人を殺すための道具にしないで下さい。いずれ自分の剣に迷いを持つ日がくるでしょう。そのときには私の言った言葉を思いだし、よく考えて下さい。」

先生はゆつくりと威厳を持って話す。

「そして、夢を決して諦めないで下さい。戦場であなたが斬る相手はその人なりの夢があります。しかし、それを奪ったあなたには自分の夢を実現する義務がある。でないと斬った相手が無駄死になります。そうやって、いくつもの夢を奪った先に大將軍というものはあるのです。このことを忘れないで下さい。そして自分を見失いかけた時には必ずこれを思い出して下さい。」

俺は空いた口が塞がらなかった。先生の言葉は俺の小さな頭ではおさまりきれないきれないほど大きかった。

「いいですか。」

「は、はい。」

緊張で嚙んでしまった。

俺は先生の言葉に言葉以上の多くの意味が込められていることに気づいた。恐らくは過去に先生は何かあったのだろう。しかし、俺はそれを敢えて詮索はしなかった。

先生はにっこりと微笑み、

「帰りますよ。」

と一言言った。

月の光は試合の前よりも一層明るく、道を照らしている。帰路、先生は終止穏やかだった。

卒業（前書き）

ようやく施設での生活は終わりを告げる

卒業

暖かい風が吹き始めてきた。

周りは緑が増え、小動物が活動するようになり、暖かい日差しが辺りに降り注ぐ。

それらの環境はまるで、俺達の卒業を祝福しているかのようだった。

ここ、プロシードは12年前の大戦から創立したため、第一期生である俺にとっては初めての卒業式であった。

プロシードの中にある、最も広い講堂に同期生200名とその他の下級生全員が集まっている。

それはとても壮大な風景であった。

生徒の並び方は向こうであらかじめ適当に決められており、俺はちようど真ん中に位置していた。

周りは初めての卒業式ということで静まり返っている。

待つこと数分、微かな足音をたてながら後ろからファブル先生が歩いてきた。ファブル先生は正装しており、いつもより若々しく見えた。生徒たちを横切り、俺達の前まで歩いてくる。他の教官も大き

な荷物を持って、先生に続いてきた。

（そろそろか………。）

緊張が高まる。辺りは一層静まり返っている。

「これより、第一回ファブル・プロシードの卒業式を始めます。」

ファブル先生の大きな声により、俺の最初で最後の卒業式が、今、始まった。

（もうそろそろだ………、緊張するな。）

生徒一人一人が丁寧な物腰で証書と剣を手に取り帰ってくるのを見て、俺は額に汗が溜まるのを感じた。

プロシードの卒業式では各人が訓練終了の証明書と基本的な武器である剣を受け取ることになっている。

今ちょうど3分の1ほどの生徒が貰い終えた所で、俺は刻一刻と迫り来る順番に緊張が高まっていた。

だんだんと心臓の音が高まる。辺りが静かなためか、俺は余計心臓の音が大きく聞こえた。

（静まれ．．．．．、静まるんだ。）

不意に聞き覚えのある名前が呼ばれた。

（あれは．．．．．リーファイ。）

気づくとリーファイは、はい、とはっきりとした声で答え、前へと歩いていった。「ここに修業を終え、卒業したことを認めます」

定型化された言葉と共にファブル先生は証書と刀をリーファイに渡す。その後隣りの教官から一冊の本を受け取り、またそれを手渡した。

「これは上級兵法書です。兵法学の成績一番は素晴らしいものでした。今後の活躍を期待します」

（随分と様になっているな、リーファイは．．．．．）

次に呼ばれたのはサイだった。サイはいつもとは違い、堂々とした

足取りで近づき、丁寧に受け取る。

サイは槍術トップの記念として受け取った上物の槍を大事に抱え、にやにやとしながら戻っていった。

それからは時間が先ほどとは打ってかわって早く過ぎていった。

「ライ、こちらへ」

すでに緊張はなかった。俺はゆっくりと先生のもとへと歩き出した。

先生から証書と刀を受け取る。

（ここまで長かった。ようやく卒業か……）

先生はゆっくりと剣をもう一本、俺に差し出した。その剣は上物で随分と長かった。

「剣術一番おめでとうございます、今後の活躍を期待します」

先生の暖かい言葉に礼をし、ゆっくりと戻った。

最後に主席のリーファイが、今後の意思表示をし終えたところで卒業式は幕を下ろした。

「今日のおまえの姿最高だったぜ！」

荷造りをしながら、サイがとても明るい表情で話しかけた。

「どうも、…………結構大変だったよ、あれは。前日になんり練習をしたしな」

リーファイは少し照れていた。

俺たちは荷造りを終わると、出発まで談笑しあっていた。

出発の時間になり、俺たちは集合場所へと集まった。

そこには、俺が拾われた時に乗った馬車があった。

他にも三台あった。

「俺たちはこれから仕官することになるんだな……………」

唐突にサイが話し始めた。

「ライヤリーファイとは違う部隊になるかもしれないな。でも、…………でもたとえ離れ離れになっても俺たちは友達だ！！これからもずっと……………」

「サイにしては随分と思い切ったことを言うなあ。俺もそれには同感だ」

「同じく」

そうして俺たちは互いに笑いあった。

時間になり、俺たちは馬車に乗った。俺は隅へと静かに座り、深く考えこんでいた。

これからのことについて。

(ついに士官……か、これから兵士になるんだな)

思い出すのは二二年前のあの日のこと。

（帝国はこの一二年間何もしてこなかったわけではない。小規模な争いを起こしていたし、何よりタラントと同様に力を蓄え、侵略の機会をうかがっているはずだ）

手を強く握りしめる。

（今度きたら必ず返り討ちにしてやる！！）

ガタン、という音と共に馬車が動き出した。 向かう先は都、ピー
スバーク。

（もしかしたら、俺はようやく動き出したのかもしれない……
・。一二年前に止まった俺の中の歯車が……）

この一二年間、気持ちの整理をしていた。

大將軍とはその名の通り、この国の軍事を統帥する権利を得られる
職だ。

つまり、俺が総大将となり、俺自身の手で帝国を討てるのだ。

（大將軍になる！！何年かかっても・・・、そして必ず帝国を討つ！！）

今ようやく俺の戦いは幕を開けた。

世界観説明（前書き）

世界観の整理

世界観がわかりづらくて頭に入らなかった人はぜひ見てください

世界観説明

世界観

ユーロヒアン大陸には11カ国もの国が存在し（極小国を除く）、その国々は毎年領土争いに凌ぎを削っていた。

とりわけ、ティラノポリス皇国、ミストクラウン帝国、ミストラル帝国は大陸統一の野望を掲げ、日夜侵略を繰り返していた。

そんな中、小国は同盟を結び、大国の進行を防いでいた。

タラントもその中の一国でミリタリア、コスクと同盟を結び、帝国の進行を抑えていた。

しかし、近年、海外貿易により力を蓄えていた帝国がタラントに大軍を率いて侵攻を行った。

侵攻軍を辛くも打ち破るが、国土面積の半分近くを失い、多くの犠牲も出した。

そして、今、再度の帝国の侵攻の危機に陥っている。

帝国とタラント（前書き）

帝国が遂に動き出す

物語は新たな展開を迎える

第二章スタート

帝国とタラント

ミストクラウン帝国

首都ウエルター

ウエルターを中心に位置する王宮の政務の間に一人の男が入ってきた。

その男は筋骨隆々で、顔にいくつもの傷跡を持った、いかにも武人といった風貌であった。

玉座に座り込んでいた王はその男を見て不敵に笑う。

「ハンゲルグ將軍、待ちわびたぞ……！」

ハンゲルグと言われた男はその言葉に深々と頭を下げる。

「一二年間の停滞期を終え、今後どのように侵略するのか詳しく聞かせてもらおうか」

「はっ、では説明させていただきます。我々が今攻めるべき国はミリタリアです。前大戦、我々がタラントを攻め切れなかったのはタラントが北西に位置するミリタリアと南東に位置するコスクと同盟を結んでおり、首都攻略前にそれらが横から攻めてきたからです。」

「ふむ」

「そこでこの同盟国の一角であり、攻めやすい位置にあるミリタリアをつぶします」

「しかし、ミリタリアを攻めたところで、再びタラント、コスクが立ちふさがれば必然的に前回と同じ結果になるのではないか？」

「はい、ですからそうならないようにこの一二年策を練り、準備をしてきました」

そこでハンゲルグはおもむろに懷から地図を取り出した。

「まず、我々の隣にはミリタリア、タラント、ホムルンが存在します。」

今、ミリタリアを侵略する際に一番注意すべきはタラントです。

隣国のため、攻める際にタラントが侵攻してくる危険があり、防衛に大幅に戦力を割かなければなりません」

周りの重臣たちが息を潜む。周囲は沈黙に包まれていた。

「そこでわたしは我々と同様に大陸統一を目指すミストラル帝国と密かに同盟を結びました!!」

(・・・・・・!?)

その言葉に場の空気が変わった。

「ミストラル・・・・・・と」

「はい。」

ここでミストラル帝国にはタラントに牽制を仕掛けてもらいます。これによりタラントは援軍を出せず、ミリタリアは背後のミストラ

ルにも気を遣わなければなりません」

「むむむ・・・・・・・・」

周りの重臣たちが一様にざわめく。

「ホムルンとは不可侵条約を結びました。
コスクはタラントを経由するため、ミリタリアへの援軍は遅れることになります。」

それまでにミリタリアを落とします!!」

その言葉にあたりは静まり返った。

しばらくし、国王がようやく重い腰を上げ、ハンゲルグに腕をかざす。

「見事な作戦だ!!今度の侵攻戦、期待しておるぞ。我が国大將軍ハンゲルグ・ボーアよ」

「は!!」

ハンゲルグは深々と礼をする。

その口元には不敵な笑みが浮かんでいた・・・。

ガタン、という音と共に馬車が止まった。三日間の短い旅を経て、ようやく都へと着いたようだ。

周りは白や赤がメインの色とりどりの美しい街並み。それが均等に横へと並んでいる。

周りは人で溢れ、人々は皆、上物の服を着ており、都を一層彩っている。

(これがタラントの都、ピースバーグか!!)

初めて見る都はあまりにも優雅な場所だった。

「みなさん、これから役所へ行きますよ」

ファブル先生の声に従い、俺たちは役所へと向かう。

(・・・・・・すごいな)

都はなにもかもが華やかだった。

(・・・でかい!!)

少し歩き、都の役所へとついたが、建物は想像していたよりも遙かに大きかった。

分厚い鉄の門は異様な威圧感を放ち、門の前にきたものを圧倒する。

「ここら任官を行う場所ですので、普通の役所はこんなにも大きくはありませんよ」

先頭にいる先生が皆の様子を見て言う。

しかし全ての者が建物の大きさに圧倒されていた。

「その者!! 何用か? 用件を言え!!」

門兵長と思しき男が高圧的な態度で尋ねてきた。

「私はファブル・フロイストです。プロシードから新兵となる二百名を連れてきました」

「ファブル様でありましたか。どうぞお入りください」

急にかしこまった返答をし、門兵長は近くの門兵たちに命令し、門を開けさせた。

門のすぐ後ろに建物への一本の道があった。俺たちはそこを通過して建物へと入った。

「ファブル様ですね。すでに任官の準備ができております。私の後についてきてください」

建物に入ると大柄な男が俺たちを迎え、ついてくるように促した。

しばらく男について行くと、男は急に立ち止まり、前の扉を開けた。

その中とはとてもなく広がった。

奥には一段隔たりがあり、屈強そうな男たちが横一列に何人もいた。

「プロシードの訓練生を連れて参りました。」

「ご苦労」

男たちの中で一人だけ前に座っていた、目つきの鋭い男が受け答えた。

その男は整った顔立ちをし、頭が切れるという言葉が似合うような男だった。

男はゴホン、と一回咳をすると、目をかっで見開いた。

「私は政務を担当する役人のフォルドだ！！今からお前たちの任官を始める！！」

全員、近づいてこい！！」

俺たちは言われるがままに段差のあるところまで近づき、次のフォルドの言葉を待った。

フォルドは俺たちをゆつくりと見渡す。

「では、これから任官式を始める。まず、ここにいる全ての候補生を正式にタラント国の兵士と認め、その任を与える。また、全員に士族の身分を与える」

その言葉に俺は驚いた。

（俺が………士族！？）

「ついでには各人の所属を決める。俺の後ろにいるのがこの国の將軍である。この將軍たちの中の一人がこれからのお前たちの上官となる」

「まずはリーファイ、ホフマン將軍の所属とす。次に………」

初めは首席のリーファイから始まり、次は適当に発表されていた。

緊張で額に汗が滲むのを感じる。

「次にライ、ロゴウ將軍の所属とす」

俺の名前が呼ばれた。

ロゴウという將軍が俺の上官となるようだが、後ろの誰がロゴウ將軍なのかよくわからなかった。

しばらくして、サイの名前が呼ばれた。

どうやらサイも俺と同じくロゴウ將軍の配下のようだ。

「以上で発表を終わりとす。後は各將軍の指示に従うように。これにて任官式を終える」

そうすると、後ろの將軍たちが前に出て、配下の兵士を呼び寄せる。

「このロゴウの部下はここに集まれー!!」

その中でも一際大きな声を放つ男がいた。

ロゴウ將軍だ。

將軍は太い眉毛に、鋭い目つき、立派な口ひげと顎髭を持つ大柄な男だった。

「さっそく俺たちは演習を行う。これから都を出て、俺の駐屯部隊がいる場所へと向かうぞ！！」

その言葉と共にロゴウ將軍は段差を下り、ついて来い、と言って部屋を出て行った。

（どうやら俺たちは都を眺める十分な時間も与えられないやうだな）

ロゴウ將軍とは随分と精力に溢れた將軍のようだ。

（だがその方がいいかも名。少しでも多く経験を積んでおかなければ）

皆が固まっている中、俺は真っ先に將軍を追いかけた。

外に出ると、將軍が門の前で立ち止まっていた。將軍の隣りにはフアブル先生がいた。俺は二人の様子を見て、足を止めた。

「すみませんね。」

「少しだけ生徒達に別れの挨拶をさせてください」

「お前の頼みとあつては聞かないわけにはいかないな。はやくしろよ」

先生は申し訳なさそうに言い、將軍はそれを許した。

（ん？……この会話）

話しぶりから察するにどうやら先生と將軍は互いに親しい間柄のようだ。

後ろからばたばたと他の生徒の足音が聞こえる。

しばらくすると、足音が止まった。

後ろを振り返ると皆あっけにとられた顔をしていた。

先生は全員がその場に集まったのを確認すると、俺たちをゆつくりと見渡し、

「皆さん、もう都を去ってしまうのですね
．．．．．皆、頑張ってください」

とゆつくりと言った。

一言一言が温かみを持っていた。

「この一二年間、あなた達を育てることができて本当に良かったで

す。

この一二年間は私にとってはとても楽しい日々でした。皆さんと別れるのは本当に悲しいです。

ですが、これから先は私の助けはいりません。

自分達の人生が始まるのです。

そこからは自分の手で新たな自分の未来を切り開いてください。

……皆さんの活躍期待しています。

私からはそれだけです」

聞いている生徒の中には目に涙を溜めている者もいた。

俺も先生の別れの言葉に強く胸を打たれた。

「また、プロシードに来てください」

そう言って先生は手をかざし、役所へと入って行った。

「全く、せっかくいいムードで演習に向かう予定だったのだが、あいつのせいで白けてしまった」

その將軍の言葉に耳を傾ける者は誰もおらず、皆先生の後ろ姿を見送っていた。

俺は先生が役所の中に入り、視界に映らなくなった後もずっとその光景を見つめていた。

「行くぞ」

不意に將軍は抑揚のない言葉を放ち、外へと出た。

俺は一瞬の後、將軍の方へと振り返った。

（そうだ、何も悲しむことはない

また会える

生きている限りきつとまた会える！！

今度会うときは戦場で武功をたててからだ！！）

ファブル先生との別れを終え、俺は新たなる舞台へと向かうため、目一杯將軍の下へと駆けだした。

入隊（前書き）

都を出て辺境の地を訪れたライ

ライはそこで新たな仲間と出会う

入隊

チュン、チュン、と小鳥のさえずりが聞こえる。

周りを見渡すとまだ誰も起きていなかった。

(・・・体がだるい)

しばらくぼつつとしていると急に馬鹿でかい声が鳴り響く。

「全員起きろ!!!」

ようやく着いたぞ!-!」

大地を震わすかのような声に皆が飛び起きた。

これを聞くのは今日で五回目だ。寝ている時にこれをやられるのはたまったもんじゃない。

今日は早く起きて正解だった。

ファブル先生との別れを終えた後、俺たちは都を出て外に置かれた馬車で將軍の部隊が待機しているフィリピス地方へと向かった。

フィリピス地方はピースバーグから北西の位置にある地域で豊かな自然環境と豊富な資源で有名な地域だ。

都から旅立って五日目、俺はついにフィリピス地方へと足を運んだ。

馬車から降りると、辺り一面の原っぱに將軍の兵が整列していた。

皆、右手に槍を、左手には盾を持ち、隊列は乱れたところが全くなかった。

これだけでも將軍の兵士は精兵であることがわかる。

「前に話した通り、たった今新人兵を連れてきた。
補充予定の伍長は前に出る！！

これから、補充した六十名の配置を決める」

すると、將軍は一人ずつ俺たちの名前と担当する伍長の名前を言い始めた。

その間、伍長達はそれぞれ、俺たちを品定めするように見つめる。

「ライ、お前はワグナーの下へと配属する」

すると、俺の上官となるワグナーという伍長が前に出てきた。

右頬に刀傷がある、無精髭を生やした強面の中年の男だった。

ワグナーはしばらく俺を見つめると、

「よろしくな、ボウズ」

と言って、握手を求めた。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

俺はそれに素直に握手を返す。

握った手は異様にゴツゴツしており、所々に傷が見られた。

ワグナーという男は姿や雰囲気から何度も戦場を駆け巡ってきた人物のように感じられた。

しばらくし、將軍は全員の名前を言い終えると、

「よし、これで全員の配置を終えたな。」

俺は、少し野暮用がある。

俺がいない間にお前たちは伍のメンバーと仲を深めておけ」

と言うと、副官と思しき男とどこかへ行ってしまった。

俺はぼんやりとその後ろ姿を見てみると、後ろから不意に肩を叩かれた。

振り返ると、俺の肩を叩いたのはワグナーだった。

「おい、ライと言ったな。

俺について来い。

今から俺の部下を紹介する」

そうして前へと歩きだした。

言われるままについて行くと、ワグナーは部下と思われる三人を呼び寄せ、離れにきて、全員に座るように言う。

俺たちは円を作って座った。「まずは自己紹介からだ。

ボウズ、軽く自分について言ってみろ」

ワグナーのその言葉に伍の他の三人が俺に視線を集める。

俺は少し緊張し、一回咳をすると

「俺の名前はライです。少し前にファブル・プロシードを卒業して、都で正式に兵士に任命されてここに来ました。得意なのは剣術です

ここでは、精一杯頑張らせていただきます」

と、ゆっくりと簡潔に言った。

一昨日練習したおかげで噛まずにはつきりと言いつけることができた。

他のメンバーは、ほう、とか、へえ、と口々に呟いている。すると、ワグナーは

「まあ、ボウズにしては上出来だ。じゃあ、他の奴らにも紹介させるか」

と言って、俺の左の男に目を向ける。

「左から進めていくぞ
まずはモーラム、お前からだ!!」

「へいへい、せかさないでくださいよ、伍長。
さて、ライって言ったっけ?
俺の名前はモーラム。年は31。
メンバーの中では一番の力持ちで、戦では斧を扱っている。
わかんねえことがあったらいつでも聞きな!」

言い終えると、親指を一本立てて、自分の胸に置いた。

モーラムはとても大柄な男で、頭に髪がなく、左耳か、口元にかけて大きな傷があった。

口振りと雰囲気から、どうやら面倒見がよく、明るい人物のようだ。

「よろしくお願いします」俺はぺこりと頭を下げる。

モーラムが話し終わると、その左の男が少し体を動かし、

「ホルズだ。」

「得意なものは弓
……よろしく」

とボソリと簡潔に言い放った。

ホルズという男はどうか物静かな人らしい。

口元に濃いちよび髭を生やしているが、顔はこれといって特徴がない、のっぺりとした顔をしている。

モーラムと比べるといささか頼りなさそうに感じた。

最後に俺はホルズの隣にいる人物に目をやる。

その男は俺と目が合うと、にへら、と笑い、口を開く。

「俺の名前はウィーカー。
年は20だ。」

武器は主に槍を扱っている。

まあ、仲良くしようぜ」

ウィーカーの髪はこの国には珍しいらしい赤髪だった。

（なんとなく、サイと同じ感じがする……）

雰囲気からそう感じた。

他のメンバーが自己紹介を終えると、ワグナーはゆっくりと立ち上がり、

「最後に、俺はワグナー　この伍の伍長だ」

と言って、自分に親指を向ける。

そして、

「これで一通り終わったな。

まずはライ、この伍に入ってきたからには俺達は運命共同体だ。

へまをしねえようにしっかりと訓練しな！

二年後にお前が実戦で戦えるようにびっちりとしごいてやるかな

」！

と、ワグナーは少しドスをきかせて言った。

その言葉に、俺は少しビクツとした。

すると、ワグナーはニヤリと笑い、

「よし、すぐに演習を始めんぞ！！
てめえら、ついてこい！！」

と、大声で立ち上がるように促した。

(もう………か)

俺はすつと立ち上がる。
すると、

「ほら、行くぞ！

今日からお前は俺の弟分だ！

俺がなんでも教えてやるからな」

と、ウィーカーからポンと肩を叩かれた。

（俺はなんでこの人の弟分にされたんだ？）

しかし、心なしが嫌な気分にはならなかった。

俺はウィーカーに言われるままついて行く。

途中、俺たちよりも早く演習をしている伍の様子を見て、ようやく本物の兵士になったと実感した。

武器を片手に他のメンバーと一緒に歩くことで今までとは全く違う世界が見えてきた気がした。

今までは雲に隠れていた夢は、まだ届く気配はないがようやく姿を見せた。

不穩

この隊に入って一ヶ月が過ぎた。

この頃にはようやく俺もこの隊に馴染めてきた。

この一ヶ月、方陣や円陣といった守りの陣形を覚えさせられ、緊急の事態に対し、陣形をスムーズに変える訓練、伍による連携の訓練など、様々な訓練を行った。

また、夜は各伍ごとの実戦演習を行った。

この一日の生活は決して楽なものではなかったが、忙しい分充実しており、存外悪いものでもなく、あっという間に一ヶ月が過ぎていった。

一ヶ月も伍のメンバーと一緒に生活しているとだんだんと誰がどのような性格なのかもよくわかってきた。

特にホルズさんは困ったときに何度も助けてもらい、無口ではあるがとても優しい人なのだという事に気づいた。

入隊からちょうど一カ月後の日の昼、俺は伍のメンバーと固まって食事をとっていた。

今日の食時は芋と野菜にわずかな肉が入った汁物と小さなパンだった。

「おい、お前の肉大きいぞ！俺によこせ！！」

「嫌ですよ。ウィーカーさんは小さくても二つ入ってるじゃないですか。俺は一つですよ。早く手をのけてください」

汁物の肉を巡って俺はウィーカーと争う。年が近いせいか俺とウィーカーはすぐに打ち解けた。

年配のホルズ、モーラム、ワグナーは少し口元を緩め、面白そうにそれを見ている。

「あんまりはしゃぐなよ、お前ら」

そして、口論が激しくなった後のワグナーの注意はもはや定番となっていた。

結局、この騒動は俺が一気に肉をのみこむことで片がついた。

その時のウィーカーは大層悔しがっていたが、俺は気にしないようにした。

パンを齧りながら、外の風景を眺めていると、馬の蹄の音が聞こえた。

目を凝らすと、タラントの旗を掲げた騎兵が一騎、こちらに向かってくる。

（何だ……あれは、伝言兵？）

それは將軍への報告を行う伝言兵だった。

伝言兵は猛スピードでつつきり、將軍の陣へと入っていった。

（違う、……これはただの報告じゃない。普通ならここまで陣の奥に来たら徐行するはずだ。何かあったのか？）

俺は少し不安になり、齧っていたパンを一気に飲み込む。

すると將軍の陣からいつもとは比べ物にならないほどの怒声が聞こえた。

「何だとー！ー！？ミストラルが攻めてきた！？」

その一言に俺を含め、皆が啞然とした。

（ミストラルが・・・タラントに・・・）

持っていた汁のお椀が地面に落ちる。

ガシャン、と大きな音を立てて割れたお椀はまるで俺たちの心を代弁しているかのようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256y/>

成り上がり・目指すは大將軍！！

2011年11月21日12時36分発行